

筆者には、それが成功しているとはどうしても思えない。

なお副題として「知についてのニコル・オレームの考えをめぐって」とあり、第3章がそれに当てられているが、これまた問題の多い論述と言わざるをえない。

ちなみに『論文』はかなり冗長で繰り返しが多く、むしろ『発表』のほうがコンパクトに纏まっていたように思う。

* その変更の理由に関しては、残念ながら一言の説明も釈明もなされていない。『論文』の立論そのものが答えてくれるものと期待して読み進めて行かなくてはならないのだろうか。期待が叶えられるかどうかはともかく、表題の変更に関しては、その理由を、読者には論文冒頭で説明しておくのが著者の義務であろう。

* * *

討論報告（司会者）

森田 良紀

中村治氏が先ず自ら提示した問題についてペーパーを読み、引続いてコメントーターの日下昭夫氏が立ち、発表された中村氏のペーパーについて幾つかの問題点及び疑問を述べて両者のあいだに熱のこもった討論、やり取りがなされた。会場からも四人の質問者が次々に立って質問し、提題は色々な課題や疑問を孕みながら、却ってそのために会場は熱を帯びたのではないか、と思われる。

次に、私は自分の目を通して私なりに理解した提題の問題点や疑問点について、私の考えを不確かさは不確かなまま、疑問は疑問のままに私の考えを正直に自由に述べることにしたい。それに先立って私はそもそもいつニコル・オレームの名を知りその名前を目にしたか、を述べて置きたい。なぜなら今でもオレームの名は誰もが知っているわけではないのだから。私がオレームの名を目にしたのは、もう随分以前の事であるが、A・コイレ著の『ガリレイ研究』¹⁾を読んだ時であった。開巻して殆ど冒頭ちかくにブリダンの名があり、次にオレームの名前が続いていた。いかに怠惰な私でもブリダンの名はロバの比喩と結びつけて知っていた。しかしオレームはこの時はじめて目にした名前であった。そうして、これをきっかけにしてオレームの三角形なるも

のを知り、また、ガリレイが物体落下の加速度の法則を証明したのも正にこの三角形を用いてであることも間もなく知った²⁾。ニコル・オレームの名はそれからは私の記憶から消えないままであるし、オレームへの関心も持ち続けたまゝである。それから暫くして彼の『天体論註解』の全文がカナダの学術誌³⁾に載っているのを知りコピーを取って今も手元にある。しかし怠惰な私は正直に言ってあちこち拾い読みをただけで、全くの無知であるに等しい。これから私は私の疑問に思う点、問題とと思う点の幾つかを述べるが、同時にコメンテーターや四人の質問者の議論と重ね合わせて読む事によってすこしでも私の無知をいやしたい。

疑問点その1、私が真っ先に知りたい問いは、数学、特に幾何学とオレームの天文学とはどの様に結びつくのか？ と言う問いである⁴⁾。先に述べたオレームの三角形が示す様にオレームは卓越した数学者である、その数学がその天文学に結び付くのか？ 結び付かないのか？ 結び付かないとしたら何故なのか？それが私の問いであり、知りたい疑問である。

問いのその2、であるが、提題者が読まれた論文の中で54頁・55頁・59頁と四回にわたって使用されている“思考実験、”という言葉の意味内容である。この語は恐らく多義的であって多くの意味を持つにちがいない。筆者の場合は55頁から56頁にかけての記述から、この語は経験、理屈、観察の三つのモメントを含む語である事が分かる。これに対して、全く性格を異にした正に思考実験と呼べるものがある。それは、或る天体の不規則運動を説明する為の所謂《見えを救う—salvari apparentia—》思考上の幾何学的工夫である周転円や離心円がそうである。これは完全に思考上のものであって現実には実在しない。これは正に或る種の思考実験ではないのか？トマスもこの実験についてスソマその他⁵⁾で述べている。このような思考実験はオレームではどう取り扱われるのか？

問いのその3、60頁に《天界について……得られる情報はわずか……である》とあるが、古代から或るいは好奇心のため或るいは生活のために古代から蓄積された観測データは膨大であり、近代になるとチョコ・ブラーエによって精度を高めたデータと併せ、ケプラーの三法則が獲られたのではないか？

注

1) A. KOYRÉ, *Études galiléennes*, Paris, 1939.

- 2) A.R. Hall, *The Scientific Revolution 1500~1800*, p. 82. Pierre Duhem, *Études sur Léonard de Vinci*, iii, pp. 375~398.
- 3) *Medieval Studies*, Vol. iii, Vol. iv, Vol. v, Toronto, Canada.
- 4) M. Clagett : *NICOLE ORESME* …… and the Medieval Geometry of Qualities and Motions.
- 5) *Summa theol.* Prima Pars, q. 32, a. 1. ad secundum et *De caelo et mundo*, L. 1, lect. iii, 28.

大会で質問に立たれた四氏全員にお願いして、それぞれの質問の内容と論旨についてのペーパーを送って頂きました。それ等の原稿が以下に見るペーパーです。(ABC順)

(1) 片柳 栄一

私の質問は、理性をまごつかせるために、理性をもちいるというオレームの企図が懐疑主義の伝統に属するとするグラントの主張と、オレームの意図は、軽信を戒めることにあったとする中村氏の主張は矛盾対立するものでなく、懐疑主義の基本モチーフとして、軽信への戒めということがあったのではないかということである。中村氏はグラントが、オレームの態度を傲慢としていることを批判したいのだということだが、中村氏は傲慢という言葉をあまりに道徳的に取りすぎているのではないか。グラントは、オレームの無知の表明が「冴えたそして教育ある精神の持ち主の自信を隠すための試みであった」と言いたかったのであり、それはソクラテス以来のアイロニーの精神の伝統であると思う。確かにそれは、自分の方が実はより賢いのだということとを自覚し、隠しているのであるから、人間同士の間では、その意味で傲慢と言われるかも知れないが、だからと言って、この方法が、軽信への戒めと並び立たないものとは思えない。オレームは人間の間での“傲慢な”方法で、軽信を戒め、神の前での謙遜を自覚すべきであると教えようとしたとも解釈出来るのではないか。

(2) 渋谷 克美

私の質問は次の二つでした。

質問 (1)

オレームが地動説を採用しうる幾つかの根拠を挙げながら、結局は天動説を採る理由についてグラントは、くオレームは哲学と神学の争いから生じてきた懐疑主義の伝

統の後継者であったからである〉という説を唱えており、このグラント説に対して、中村氏は反論している。然し、そもそもグラントの言う〈哲学と神学の争いから生じてきた懐疑主義〉とは、歴史上の如何なる立場を指しているのか。

質問 (2)

中村氏は、グラント説に対する反論の第二番目の理由として、「中世後期には自然哲学者と神学者の間に争いはなかった」と述べ、従って、グラントの説は認められないとしている。然し本当に、中世後期には哲学と神学の間に争いがなかったと言えるであろうか。例えば、オレームよりも三十年くらい前のオッカムの場合には、彼は哲学や論理学の議論をしている時でさえも、絶えず神学上の真理ということに気を使いながら書いている。このことは、とりもなおさず、中世後期においては哲学と神学の間が相当にぎくしゃくしていたことを示していると考えられる。中村氏の言うように、「中世後期には哲学者と神学者の間に争いはなかった」と果たして言えるのであろうか。

(3) 清水 哲郎

天動説と地球自転説との対応につづいて、オレームが最終的に前者に加担する理由についての中村氏の解釈に疑義がある。

オレームはこの理由のなかで「神は地球を堅く建て、それは動かされることがないのであろう」という聖書の句を引いているが、中村氏はこれは地球自転説を否定する理由にはなりえないとする。なぜなら、氏によれば、オレームは「日は昇り、日は沈み」という表現や、ヨシュアの時代に太陽がその動きを止めたという記述を、見かけ上のことであるかもしれないと言って、地球の自転と矛盾しないように解釈できている点からして、聖書を字義通りに受け取ることが信仰であるとは考えていなかったのだから。

しかしこの中村氏の論にはわかには納得し難い。というのは氏が挙げる論拠の限りでは、オレームは上述の聖書の句のそれぞれについて地球自転説と矛盾しないように解釈できると個別に言っているに過ぎないからである。つまり「聖書のある箇所は地球自転説と矛盾しないように解釈出来る」ということと「聖書のすべての箇所は地球自転説と矛盾しないよう解釈できる」ということとは違ふ、オレームが言っているのは差し当たり前者でしかない。それにもかかわらず、中村氏は前者から後者を引き出

し、吟味なしに「神は地球を堅く建て云々」という詩篇の句にも適用してしまっているように見える。

だが、オレームが言っているといえるのは前者でしかない以上、「神は地球を堅く建て云々」については、前掲の箇所とは違って、地球自転説と矛盾しないように解釈することはできないと考えたが故に、オレームは地球自転説を否定し天動説を認める典拠となる啓示としてこの句を提示したのだ、と解することは十分可能であり、中村氏の議論はこの可能性を否定するものとはなっていない。

この点は、中村氏の本論全体の議論の筋道からいって見過ごしに出来ないと思う。

(4) 渡部 菊郎

中村氏は日下氏の質問に対しては、理性をアリストテレス以来のものであると答えられた。他方、立論においては、「天動説か地動説かは自然学そのものだけの問題ではなく、神学の問題でもある」と言われている。「仮説」の位置づけはどうなるのか。アリストテレスにとって学知（エピステーメー）は「他であり得ないもの（必然的なもの）」にかかわるのであり、仮説や蓋然的なものは弁証論（ディアレクティケー）の対象となるのではないか。

理性と一口に言ってもアリストテレス以来、また特に「信仰」を全面に出すキリスト教中世においては様々な局面が考えられているのではないか。彼の「学知」の理解について質問したが、何も言っていないというだけであった。